

上級日本語学習者との会話における 母語話者の言語行動

小松 奈々

1. はじめに

現在日本の大学等で学ぶ留学生は11万人を上回っており、日本語母語話者が彼らと日常的に接する機会も多くなってきている。留学生は入学前に母国や国内日本語学校で日本語を学習してきており、日本語能力試験1級に合格するなどそのレベルは高い場合が多い。母語話者側にも、日本人と同じように話しても大丈夫だという前提があるように思われる。

しかし、実際に母語話者は彼らに対し母語場面と同じストラテジーを用いているのか、また、言語調整を行っているとするればどのようなもので、それは適切な使用なのかということは明らかになっていない。本研究は、母語話者の言語行動を明らかにすることで、接触場面においてよりよいコミュニケーションを築いていくにはどのような改善が必要であるか探ることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 フォリナートーク研究

学習者に対する母語話者の言語行動のうち言語調整に焦点を当てた研究として、フォリナートーク研究が挙げられる。特にロング(1992)ではフォリナートークが「言語形式的なもの」と「機能的なもの」に分類された。「言語形式的なもの」とは借用語の使用、助詞の省略、短い文の頻用などであり、「機能的なもの」には理解の確認、明確化の要求、語・節の繰り返しなど談話面での言語調整が含まれる。また、徳永(2007)では語彙などの表層的な部分に比べ言語行為の方略的な部分は調整対象として意識に上りにくいことが指摘され、そのうち話題管理に関しては母語場面の習性を接触場面でもそのまま用いる傾向があることが明らかにされている。

2.2 発話カテゴリーを用いた研究

母語話者の言語行動の特徴を、発話カテゴリーを用いて会話全体から探ろうとした研究としては、藤

本ほか(2004)、一二三(1999)が挙げられる。藤本では、母語場面での会話の特徴を探るため、会話の目的を討論条件と親密条件に分け、それぞれの特徴を明らかにした。討論条件ではひとつの発話が長くひとつのトピックについて深く話されるのに対し、親密条件ではひとつの発話は短く、ターン交替が頻繁に行われ、トピックの移り変わりが早いことが確認された。一二三(1999)では、接触場面と母語場面での母語話者の発話を比較するため、発話を機能によりカテゴリー分けし、発話の量的分析を行った。その結果、母語話者は、母語場面では互いに情報提供を活発に行っており、相手の発言に意見を述べたり相手の発話に対する評価を頻繁に行っていることがわかった。それに対し、接触場面では質問など情報を要求する発話が多くなり、自分から情報を提供することは控えられる。また、相手が理解しているかどうか確認したり相手の発話に対し説明を求めたりする意味交渉の発話が多くなることが明らかになった。

しかし、以上に取り上げた接触場面での先行研究では母語話者の会話相手として初級または中級学習者が選定されており、上級学習者を会話相手にした母語話者の言語行動の特徴はまだ明らかになっていない。そこで本研究では、上級日本語学習者を会話相手とした日本語母語話者の言語行動を明らかにすることを目的とし、以下の研究課題を設定した。

研究課題1 上級日本語学習者に対する母語話者の発話は、初中級日本語学習者に対する母語話者の発話と比べてどのような相違があるか。

研究課題2 上級日本語学習者に対する母語話者の発話は、母語場面と比べてどのような相違があるか。

3. 研究方法

3.1 被験者とデータ

被験者は日本国内にある女子大学及び大学院に通う母語話者（以下 JS）9名で、会話相手による発話の違いを見るため、接触場面6組と母語場面3組を設定した。接触場面の会話相手は、同大学及び大学院に通う中国語を母語とする上級日本語学習者（以下 CL）6名で、日本語レベルは上級、日本語能力試験1級合格レベルである。参加者同士は初対面ではない。

データは、本研究で収集したものと先行研究からのデータを使用する。本研究のデータは、接触場面、母語場面とも、「おもしろかったこと」というテーマで20分間自由に会話をしたものをICレコーダーで録音したものをを用いた。

3.2 分析枠組

分析枠組には、一二三（1999）で用いられた発話カテゴリーを使用する。これは、母語場面のみの言語行動をみるために作られた浦ほか（1986）の発話カテゴリーに、接触場面で必要となる言語行動を加味し修正されたものである（表1）。

表1 発話カテゴリー

IS(Shareing Information:情報の共有)
Q(Question:情報要求)
INF(Information:情報提供)
NM(Negotiation of Meaning:意味交渉)
IP(Processing Information:情報の合成・加工)
OP(Opinion:意見)
EV(Evaluation:評価)
NSP(Not Sharing nor Processing:相槌、実質的意味なし)
NR(No Reaction:無反応、沈黙)

(一二三 1999, p82)

まず上位カテゴリーとして、「情報共有の発話（Sharing Information 以下 IS）」と「情報の合成・加工の発話（Processing Information 以下 IP）」を設ける。IS の下位カテゴリーとして、「情報要求の発話（Question 以下 Q）」、「情報提供の発話（Information 以下 INF）」、「意味交渉の発話（Negotiation of Meaning 以下 NM）」を設ける。意味交渉の発話とは、何らかの原因で会話が中断したとき、相手に聞き返したり自分の理解をチェックし

たりする相互交渉のことで、本研究では接触場面に限らず母語場面でも起こるものと定義する。また、IP の下位カテゴリーとして「意見」「評価」を設定し、それぞれ OP、EV とする。意見とは、共有された情報に関して自己の情報を論理的に関連づける発話であり、一方、評価とは、共有された情報に対して自己の情報を情緒的に関連づける反動的な発話である。以上のカテゴリーに入らないものとして「相槌」と「無反応」を設定する。「相槌」は、実質的な意味を持たず会話促進に繋がらない発話と定義する。本研究では情報のやり取りに関わる情報要求、情報提供、意味交渉、意見、評価について分析した。

3.3 分析方法

被験者の行った会話を録音したものを文字化し、一二三（1999）の認定方法従い発話を算定、分類した。それぞれの発話を日本語母語話者1名の合意のもと、発話カテゴリーに分類した。

分析には各カテゴリーの総発話数を全体における比率に直したものをを用いた。ただし、1 会話における発話の絶対数に差がない場合は、各カテゴリーで3 分当たりに表れた発話数を出現頻度とし、対話者によって差があるか統計的に確認するため t 検定を行った。

4. 結果と考察

4.1 対上級 CL と対初中級学習者の JS の発話比較

一二三（1999）の結果と本研究の結果との比較を試みた結果、すべてのカテゴリーにおいてははっきりとした差が表れた（図1）。

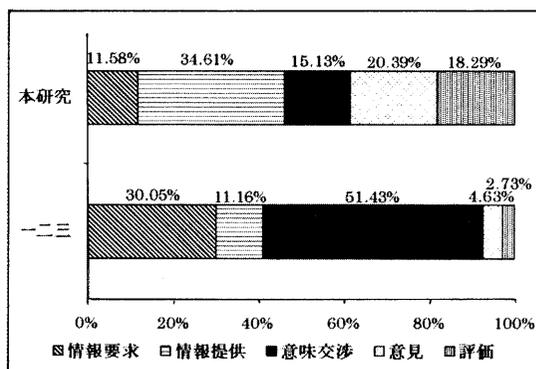


図1 対上級 CL と対初中級学習者の比較

対初中級で8割以上を占めていた情報要求、意味

交渉は対上級 CL ではそれぞれ 11.58%、15.13%と少なくなっている。反対に、対初中級では 11.16% だった情報提供が対上級では 34.61%、比率の少なかった意見、評価は対上級では 4 割近くと、大きな割合を占めていることがわかる。

この結果から、次のように考えられる。まず、情報要求、意味交渉が少ないという結果から、JS は上級 CL に対し意識的に質問をすることなく、理解の確認などで会話が中断することも少ない様子が窺える。そして、情報提供、意見、評価が多いという結果からは、対初中級学習者と比較して言語調整を意識せずに発話していることが推測できる。以上の分析から、JS は上級 CL に対して母語話者との会話のように会話を進めている可能性が考えられる。

4.2 接触場面と母語場面の JS の発話比較

分析の結果、情報提供、意味交渉のカテゴリーで大きく差が見られた (図 2)。

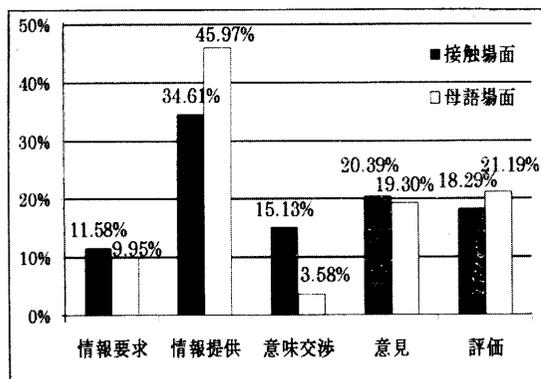


図 2 接触場面と母語場面の JS の発話比率

母語場面に比べ接触場面では、情報提供は 10% 以上少なく、意味交渉は 10% 以上多くなっている。しかし、情報要求、意見、評価に関しては大きな差が見られず、対初中級学習者と対母語話者で大きな差が表れた一二三 (1999) とは異なる結果となった。

次に、場面間に差が表れた要因を探るため、接触場面での会話参加者別に発話カテゴリーごとの発話出現数を比較した。t 検定の結果、INF ($t(10)=2.33$ $p<.05$)、OP ($t(10)=3.01$ $p<.05$)、EV ($t(10)=2.39$ $p<.05$) に有意差が認められた (図 3)。比較の結果、JS、CL の発話出現数に不均衡が見られ、特に全カテゴリーにおける比率という点で見ると、全体に分散している JS に比べ CL は情報提供だけが突出して多くなっていることがわかった。

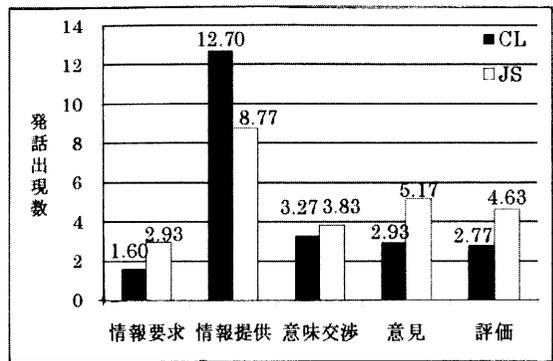


図 3 接触場面における CL と JS の発話数

以上の結果から、次のように考えられる。まず、接触場面でも母語場面と同じように情報要求、意見、評価が行われていることから、JS は CL との会話において意図的な言語調整を行っていないことがわかる。しかしながら、情報要求、意見、評価に差がないのに対し意味交渉は接触場面でもより多く現れたことから、JS は CL を上級ではあっても非母語話者として認識しており、会話で理解の行き違いがないよう慎重に対応している様子が窺える。また、母語場面に比べ情報提供が少なく、接触場面の発話状況から JS は CL の情報提供を様々な発話カテゴリーを用いて対応していることが確認された。この結果から、JS は情報の受け止めの役割を担っている可能性が考えられる。このことを表す会話例を以下に挙げる (会話例 1)。

会話例 1

【接触場面】ペア番号② (JS2, CL2)

- 1 CL2: はい 春の町と言われていて 北京から汽車であの 48 時間ぐらいもかかる[ので hh ←INF
- 2 JS2: [へえ中国広 hh ←EV
- 3 CL2: はい h あのう友達が一人で 北京から昆明まで行って 旅行してたんです ←INF
- 4 JS2: えそんな 48 時間もかかるって一緒に行けばいいのに ←OP
- 5 CL2: なんかわたし:彼女が昆明に行ったときに 一人で大連に行ったんです ←INF
- 6 JS2: あそう hhすごい趣味が違うんだよね ←EV
- 7 CL2: はい大連はまだいいですけど 北京から汽車で 9 時間ぐらいです ←INF
- 8 JS2: あそうなんだ じゃ全然違うんだね 48 時間と全然違うね: ←EV

会話例は接触場面で、中国での旅行経験が話題と

なっている。この会話では、CL2 が(1),(3),(5),(7)で一貫して客観的な事実を述べているのに対し、JS2 は(2),(6),(8)で評価をし、(4)で意見を述べている。ここでは話題の提供はCL2、受け止めはJS2と役割がはっきり分かれており、母語場面に見られるような情報提供、意見、評価の活発な交換は見られない。

以上のことから、JSはCLとの会話において、明らかな言語調整は行わないもののCLを非母語話者として意識しながら慎重に対応し、発話を受けとめる側として会話に参加していることが考えられる。この特徴は、会話相手を誤解なく理解しようとする意識の表れであり、非母語話者との会話において重要な態度であると言えるが、会話を盛り上げたり会話内容を深めようとするには、弊害となっている可能性が考えられる。

最後に、接触場面での発話数の比較において、JS、CL間に意見、評価の発話数に差が見られたことから、JSとCLでは会話の受け止め方が異なることが示唆された。

5. 教育的示唆と今後の課題

今回の分析結果から、上級学習者との会話を深めていくためには、相手の情報を受け止めるだけでなく、話題に上っている事柄について意見を求めるなどの発話機会を与えていく必要があることが示唆された。このことは、まず教師自身が教室場面で意識的に実践できると考える。また、ビジュアセッションなど母語話者参加型の授業を運営する際にも有用な情報となるだろう。

しかし本研究では課題もいくつか残された。まず発話カテゴリーが5種類のみと少なく、ひとつのカテゴリー内に複数の機能が集約されているため、具体的にどんな発話内容に差があるのかまでは明らかにすることができなかった。発話カテゴリーの低位分類をし、より詳細な傾向を見ることが必要だと考える。その上で、発話カテゴリーの隣接ペアで表れるパターンを分析し、どのような発話を投げかけどのように受け止めるかという、やりとりとしての会話の特徴を明らかにする必要があるだろう。また、

被験者の属性の問題では、母語が中国語に限定されていること、接触場面のほとんどのペアでJSの方が年齢が高かったことが結果に影響を及ぼした可能性も考えられる。今後は以上の点を踏まえ、分析を進めていきたい。

注

1. 表記は「トランスクリプトに用いられる記号」（串田秀也 2007『時間の中の文と発話』ひつじ書房）に従った。[]は発話の重なり、hは笑い、:は音の引き延ばしを表す。ただし今回は紙面の都合上、他の記号については省略した。

参考文献

- 浦光博・桑原尚史・西田公昭（1986）「対人的相互作用における会話の質的分析」『実験社会心理学研究』26号, 35-46.
- 大平未央子（2001）「フォリナートーク研究の現状と展望」『言語文化研究』28号, 335-354.
- 徳永あかね（2003）「日本語のフォリナー・トーク研究：その来歴と課題」『言語文化と日本語教育増刊特集号：第二言語習得・教育の研究最前線 2003年版』162-175.
- 徳永あかね（2007）「接触場面における日本語母語話者の発話習性—話題管理の男女差に注目した一考察—」『AJALT 日本語研究誌』3号, 3-17.
- 一二三朋子（1999）「非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連—日本語ボランティア教師の場合—」『教育心理学研究』47巻4号, 490-500.
- 一二三朋子（2001）「接触場面における共生的学習の可能性：意識面と発話内容面からの考察」お茶の水女子大学博士論文
- 藤本学・村山綾・大坊郁夫（2004）「会話状況に応じた発話行動と印象形成に関する検討」『言語的・非言語的コミュニケーションを活用する社会的スキル向上の研究』平成14,15年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書, 36-43.
- ロング・ダニエル（1992）「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中心に—」『日本語学』11巻13号, 24-32.